

本校の教育理念を表す言葉の一つに「聞法」があります。

人間は知恵によつて人間になつたとの思いからか、自然の一部として生きていたはずの私たちの祖先は、長年月かけて地球のかなりの部分を、今や知恵による世界に作り替えてしまいました。あらゆることが「人間の知恵」を中心に計画され実施され、こうすればこうなれば快適で便利で安全で速く、衛生的で衣食住に不足なく生きられると、上下水道・ガス・電気・電波・交通手段・治安・教育・医療・福祉・産業・金融・法律・災害防止・食料の確保等々について、津々浦々まで整備されました。すべて「良かれ」との思いからの歩みです。勿論、時には時には修正も変更も廃止もあります。しかし、その結果としての現在を立ち止まつて振り返ってみると、いのちの存続が危ぶまれるような環境が出来し、それでも方向転換がなかなかできません。

「一寸先は闇」といいますが、現在の温暖化論争や環境問題、さまざまな事件を見てみると、人間の知恵がカバーできるのは「一寸先」までしかないと、つくづく思います。目の前の不具合を改善し続けていくのみで、予期せぬ（あえて見ない？）他の不具合が出てきます。科学的知見は常に更新され、素晴らしい成果を上げていますが、科学から出されるのは、どこまで行つても仮説（一つの反証で覆る）であつて、真理ではありません。

「経教はこれを喩ふるに鏡の如し。しばしば読みしばしば尋ぬれば智慧を開発す」（『観無量寿経疏』）とありますが、聞法（真実に出会いたいと求める）により明らかになる人間の姿は、罪深く悩み多く、つまりは煩惱いっぱい自分の姿です。本当のことが分からないのに自分の考えにしがみついている、お恥ずかしい、申し訳ない、顔を上げることもできない、そんな私です。ところが、その私が救われるということです。その私をこそ救うと誓われた仏様がいらつしやる。私が自分で気づかない私の尊さ・意味・価値・必要性を見抜いて下さり、仏様の方から私が拝まれているということです。仏様から願われていると知ると、私の奥底に「私が私として他と共に生き活きと生きたい」という、私自身の本当の願いがあつたと知らされます。また私たちは相互に関係し合う中に存在すると教えられます。

私たちは、思う通りに、好きなように生きられたら幸せだと思ひ、それを望みますが、それは自分の本当の願いでしょうか。その本当の願いとその実現を求める営みが聞法です。私が人間に、そしてこの私に生まれた意味はどこにあるのでしょうか。その私は、今、どこにどのような存在しているのでしょうか。私と他の一切との関係はどのようであるのでしょうか。この私を生きている「いのち」はどこからどのようににして私のところまで届いて来たのでしょうか。私がお預かりしている「いのち」は、何を目指しているのでしょうか。私は、本当はどうなりたいのか、どうありたいのか。世界はどのように成り立ち、どういう特性を持っているのか。

私たちの知恵は、限られたものであり、きわめて不完全であります。しかし、その知恵を疑わず、思いあがつて、分かつたつもりになつてしまいます。そういう私たちのことを「凡夫」といいます。オウム真理教というカルト宗教がシバ神（ヒンズー教、知恵・破壊を司る）を礼拝していたのは暗示的です。

聞法の営みによつて、私が凡夫であると立ち直し、だからこそ謙虚に真実の教えに耳を傾けていく。そして、そこで知らされた見方考え方をもって、現実の生活の中に出会うあらゆることの中から、真実に気づいていこうとすることがなければ、人間の知恵による自他の破壊は免れないでしょう。